

日本の漢詩、和歌における閨怨詩の受容

—紅涙を中心に—

大戸 温子

1. はじめに

閨怨詩は六朝時代の『玉台新詠』に多く収載されているが、『玉台新詠』については古来より、それを非難する記述が多い。同時期のアンソロジー『文選』が中国文学史上大きな位置を占めていることと比べて、『玉台新詠』は長い間その価値が重要視されてこなかった。魏徵『梁論』にはその詩風を以下のように言う。

太宗聡睿過人，神彩秀發，多聞博達，富贍詩藻。然文豔用寡，華而不実，体窮淫麗，義罕疏通，哀思之音，遂移風俗，…

『隋書』文学伝序には、またこのように言う。

梁自大同之後，雅道淪缺，漸乖典則，爭馳新巧。簡文湘東启其淫放，徐陵、庾信分路揚鑣。其意淺而繁，其文匿而彩，詞尚輕險，情多哀思，格以延陵之聽，盖亦亡国之音乎！

『玉台新詠』が多く収載する宮体詩、閨怨詩の「軽艶」さを批判する。報われない恋を嘆く女性の艶やかな容姿や立ち居振る舞い、装飾品などを描くという閨怨詩の内容は、士大夫の詩として価値の低いものとみなされ、載道の立場から非難された。また、傳剛氏は論文「宮体詩論」のなかで、唐人が『玉台新詠』を激しく批判する理由として“政治教化的使命感”を挙げている。北朝の流れを継ぐ唐は、政治的に亡国である南朝の文化を排除する、貶める必要があったと述べる¹。その内容から、また政治的理由から、とにかく長い間省みられることの少なかった『玉台新詠』。その文学的価値が見直され、肯定的に研究が進められるようになったのは、ここ20年余りといえるであろう²。

しかし一方で、日本において『玉台新詠』は、中国より伝来した当初より、非常に珍重されてきたようだ。日本文学の領域においては、古くから『玉台新詠』が日本文学に大きな影響を与えたことが指摘されている。時代の早いものとしては『万葉集』の歌に『玉台新詠』の影響が指摘をされている³。勅撰三集の一つ『経国集』には「臨春風効沈約体应制」と題する滋野貞主の詩がみられ、その詩題の割注には「太上天皇在祚」とある。嵯峨天皇在位時代の作品で、沈約「臨

春風」(『玉台新詠』巻九)に倣えとの命に応じた应制詩であることが分かる⁴。閨怨詩が、当時の日本では、公の場で天皇の命のもと、典故、見本として扱われていたことがうかがわれる。日本の漢詩勅撰集は『凌雲集』(814年)、『文華秀麗集』(818年)、『経国集』(824年)の勅撰三集から始まる。その後九世紀後半の『新撰万葉集』、『千里集』が続くが、そのうち『文華秀麗集』では「艶情」、『新撰万葉集』では「恋歌」の部立があり、そこに収められている詩の多くは六朝の宮体詩を模した閨怨詩風の詩である。その『文華秀麗集』の序を以下にあげる。

或気骨弥高諧風騒於声律 或軽清漸長映綺機靡艶流 可謂輟変椎而華 冰生水以加流

ここに見られる「艶流」についてはさまざまに解釈があるが、『文華秀麗集』「艶情」の部が多く宮体詩を模したものであることから、艶詩、宮体詩を意識した詞であるといえるであろう。この序文からは「艶」であることに、中国の記述のような否定的な態度はみられず、むしろ肯定的な姿勢がみられる。六朝時代の艶詩は、日本古代の文学に歓迎され、受容されていったといえるであろう。

中国において軽視されてきた閨怨詩、宮体詩が日本において珍重された、その理由はいくつか考えられる。一つには、当時古代日本において、中国から伝えられた書籍は、およそすべて貴重な珍重されるべきものであったことが挙げられる。学ぶべきお手本であり、憧れの対象として見られ、批判の対象にはなりにくかったのではないか。もう一つには、日本において「恋歌」という題材が、日本文学史上、重要な位置を占めていたことが挙げられる。和歌において恋歌は一大ジャンルであった、そうした日本においては、『玉台新詠』に収められている詩の題材は親しみやすいものであり、また、お手本や典故として、自身の和歌に取り入れやすかったのではないか。

2. 紅涙

2.1 中国詩の紅涙

それでは閨怨詩は日本の文学にどのように受容され

ていったのだろうか。閨怨詩の受容、といってもあまりに広く漠然としているので、今回は一つの詩語の受容を追いかけることにより、その全体像の一端を見ることができればと思う。私はここで、「紅涙」の詞に注目したい。小島慶之氏はその論文の中で日本の漢詩における「紅涙」の和習を以下のように述べる。「中国の詩では本来女性の涙に使われる紅涙が、日本の漢詩では男性の涙として使われている⁵⁾。紅涙は、閨怨詩の中で美女の流す涙として使われている。もとは『韓非子』『和氏の璧』の話に由来し、悲しみのあまり、涙枯れるまで泣き、ついに血の涙を流すという「血涙」である。悲しみの極まった涙、血涙として「紅涙」を詩に用いる例も見られるが⁶⁾、閨怨詩の中で、恋に泣く涙として使われるのは、以下にあげるよう、もっぱら美しい女性の涙である。

翠黛眉低斂 紅珠淚暗銷
從來恨人意 不省似今朝
(白居易「恨詞」『全唐詩』卷四百四十八)

美人怨何深 含情倚金閣
不嘔復不語 紅淚雙雙落
(薛維翰「古歌一」『樂府詩集』卷八十六 新歌謠辭)

美女の流す紅涙、その用例を追っていくと、白居易「琵琶行」に「夜深忽夢少年事，夢啼妝淚紅闌干」という句がある事に気づく。「粧涙」とあるが、これは紅粉の化粧をくずして流れる涙のことである。涙の色の紅は、悲しみの血涙であると同時に、紅の化粧が涙で崩れる様子を表す言葉として使われている。他の作品にも以下のような記述がある。

淚黛紅輕點花色 還欲令人不相識
(蕭子顯「淚黛紅輕」)

鑪煙入斗帳 屏風隱鏡台
紅妝隨淚尽 蕩子何時迴
(武陵王紀「曉思」『玉臺新詠』卷7)

もともとは血の紅であった紅涙は、女性の姿や調度品などを美しく艶やかに描く閨怨詩の中で使われるにあたり、美女が化粧の紅をくずして流す涙、というイメージが加わったと考えられる。

2.2 日本漢詩の紅涙

日本の漢詩ではどうであろうか。その使われている例を見ると大きく二つに分けられる。一つは老いを愁

う涙として使われている例。もう一つは閨怨詩のなかで使われている例である。

醉對落花心自靜 眠思余算淚先紅
(『和漢朗詠集』「老人」菅原雅規)

樓台月映素輝冷 七十秋闌紅淚余
(『古今著聞集』式部大輔永範卿)

頭如霜雪白將尽 淚与梧桐紅不留
(『別本和漢兼作集』大蔵卿匡房「暮秋病中作」)

榮路雲遥頭半白 生涯日暮淚先紅
(『別本和漢兼作集』式部権大輔輔綱朝臣「春日遊山寺即事」)

これらはすべて老いの涙として使われている。美女の美しい涙としてではなく、和氏の璧の話に基づき「血涙」として使われている。紅涙と月の白い光「素耀」を対にし、また「白髮」と「紅涙」を対にする。「白」の色対として「紅」をもってきたと見るべきであろう。もう一つ、閨怨詩の中で紅涙の詞を使う詩は、『新撰万葉集』に四首収められている。

閨房怨緒惣無端 万事吞心不表肝
胸火燃來誰敢滅 紅深袖淚不心干
(『新撰万葉集』卷之上 恋歌二十首 二〇〇)

落淚成波不可乾 千行流処袖紅班
平生眼近今都絶 寂莫閑居口琴彈
(『新撰万葉集』卷之上 恋歌二十首 二〇八)

荒涼宅屋無双侶 粉黛懷來嬾經營
毳衣分散口収人 紅淚鎮霑服不晞
(『新撰万葉集』卷之下 恋歌三十一首 四四九)

不飽良君自別離 初夜淚河堰無留
良与我両袖染紅 怨氣散雲散雨流
(『新撰万葉集』卷之下 恋歌三十一首 四七五)

『新撰万葉集』は和歌とそれに対応する漢詩を載せる詩集である。これら四首はすべて「恋歌」の項に収められており、和歌の恋歌を漢詩に翻訳した詩である。漢詩は六朝の閨怨詩を手本として作られていると考えられる詩が多く見られる。しかし初めに挙げた二〇〇番の詩は、その元となった和歌は紀友則、男性の作

た和歌である。

紅の色には出でじ隠れ沼のしたにかよひて恋ひは
死ぬとも

和歌は男性の恋情を詠んだ歌である。二〇〇番の詩では、作者が意図的に主人公を入れ替えた可能性もあるが、閨怨詩の主人公が男性として描かれている可能性も考えられる。どちらにせよ、男性の恋歌である和歌を詩に変換する際、「閨怨詩」という形で表現している例がここに見られる。

2.3 和歌のくれなゐの涙

紅涙はさらに、日本の和歌の中にも多く取り入れられていく。日本では『今昔物語集』『太平記』『蒙求和歌』『和歌童蒙抄』『奥義抄』『俊頼髓脳』等に和氏の壁の話が紹介されている。『奥義抄』では『古今集』素性法師の和歌の「くれなゐの涙」の語釈としてこの話をあげる。くれなゐの涙は、漢語「紅涙」から取り入れた語と考えられるだろう。

八大集を見てみると、「紅の涙」がうたわれている和歌は14首あるが、そのうち11首は恋歌が占める。「恋」の涙であるが、閨怨の涙とは限らず、様々な恋の苦しみ、悲しみの涙として詠まれている。男性が女性を描くというスタイルを主としている中国閨怨詩とは違い、和歌での作者は男性、女性、どちらの作もある。男女を問わずに「紅涙」が使用されている。

相手が見つれないことへの涙 —— 4例

人目を忍ぶことへの涙 —— 2例

相手の心変わりへの涙 —— 2例

慕う心のあまり流す涙 —— 2例

例を以下に四首挙げる。

紅のふりいでつつなく涙にはたもとのみこそ色まさりけれ
紀貫之『古今集』

白玉と見えし涙も年ふればから紅にうつろいにけり
紀貫之『古今集』

くれなゐに涙しこくは緑なる袖も紅葉と見えましものぞ
『後撰集』

あくといふことをしらばやくれなゐのなみだにそむる袖やかへると
『金葉集』

2.4 まとめ

以上、中国詩、日本の漢詩、和歌と見てきた。中国詩では紅涙には①血の涙②美女の涙の二種類があるが、詩語として使われている例は、閨怨詩、宮体詩において使われる例がほとんどで、その際もつばら美女の涙として使われていた。日本の漢詩では、①老いを愁う翁の涙として使われる例②閨怨詩の中で使われる例の二種類が見られた。中には男性の作である恋歌を閨怨詩に変換する例も見られた。和歌においては、

主に恋歌のなかで多く使用されていた。紅涙は、男性女性、どちらの涙としても使われ、また閨怨に限らず、様々な恋の辛さを表現した。

3. 結語

日本と中国には二点の違いがある。一つは、恋を主題とする詩を集めた「玉台新詠」は中国においてそれを批判する記述が多くみられるが、日本の和歌において恋歌は大変重要な位置を占めているという点。漢詩集においても「艶情」「恋歌」という項目がたてられ、恋をテーマとした詩が作られた。二つ目は、日本では和歌の恋歌においては男性が自身の恋情を歌に詠むことが普通に行われていた。しかし中国の詩においては男性が自身の恋情を詩に詠む例はほとんどみられない。

そうした状況を受けて、日本の男性の恋心を詠った漢詩にも、多く恋愛の歌を収めた玉台新詠の詩、閨怨詩、宮体詩がお手本や典故として使われたのではないかと考える。

紅涙は、こうして男性の恋情を詠う詞として使われる過程の中で、「涙黛」や「紅粧」などからくる女性的なイメージ、「美しさ」という要素が抜け落ち、もとの「血涙」としての要素、「激しい悲しみのあまり血を振り絞るようになく涙」という要素だけが残されたのではないだろうか。

『新撰万葉集』恋歌上の二百番の詩を見ると、「閨房」という言葉や閨怨のテーマを使いながら、「女性の姿態や装飾品を美しく描く」宮体詩とは異なり、そのつらい「心情」を軸にして描く。作品の主眼は内側からこみあげる激しい感情を表現することと、私はとらえている。外からの視覚的な描写ではなく、内面からの感情の描写である。この「内面の感情の描写」こそが、日本閨怨詩の特徴ではないだろうか。和歌はもと、自身の思いを表現して相手に贈るといふ、手紙のような役割をしていた。和歌の例を見ると、閨怨の思いに限らず、様々な思いを表現している。そこには感情の表現にこそ主眼を求める姿勢がみてとれるだろう。一方で宮体詩の閨怨詩は、「閨怨」というモチーフ、物語を再現するものである。自身の感情を内から表現するのではなく、主人公を外から描いている。視覚的な描写、立ち居振る舞いや衣装、調度品などを美しく描くことに主眼を置く。宮体詩の源を詠物詩とする説が見られるが⁷、主人公の女性を詠物詩の「物」という視点で描く、と言えるかもしれない。視覚的な描写は女性と男性とで大きく異なってくる。だから女性的なイメージを持つ紅涙は男性の涙としては使われにく

い。しかし内なる心情は、男性も女性も同じであろう。日本には、和歌においてそうした、内なる心情を描写する語として使われたため、男女共に使われるようになったのではないだろうか。

こうした男女の語の混同は、紅涙の他にもみられる。

和内史貞主秋月歌。一首。御製
天秋夜靜月光來。半捲珠簾滿輪開。舉手欲攀誰能得。披襟抱影豈重懷。
雲暗空中清輝少。風來吹拂看更皎。形如秦鏡出山頭。色似楚練疑天曉。
群陰共盈三五時。四海同朋一月輝。皎潔秋悲班女扇。玲瓏夜鑿阮公帷。
洞庭葉落秋已晚。虜塞征夫久忘歸。賤妾此時高樓上。衝情一對不勝悲。
三更露重絡緯鳴。五夜風吹砧杵聲。明月年年不改色。看人歲歲白髮生。
寒聲漸瀝竹窓虛。晚影蕭條柳門疎。不從姮娥竊藥遁。空閨對月恨離居。

班女の扇、阮公の帷、姮娥の葉、などから中国詩の影響を強く受けていることがうかがえる作品である。全体の構成は三部からなり、秋の月を詠じる第一節、秋の悲哀を詠じる第二節、閨怨の情を詠じる第三節からなる⁸。秋の夜に、帰らぬ夫を待ち、悲しみに沈む女性、時間の経過と自らの老い、美しさの喪失を嘆くテーマは、六朝の閨怨詩から学んだものといえるであ

ろう。ここでおかしいのは、女性の老いを「白髮生」と表現する点である。白髪を生じるのは男性であり、女性が自らの白髪を嘆くという表現は六朝の閨怨詩には見られない。ここでも男女の詞の混同が起こっているといえるであろう。こうした使われ方は「和習」和の習い、と呼ばれる。「日本人の誤り」であるが、多くの人が同じような誤りを犯す、そこにはおそらく何らかの理由がある。そこに日中間の文学観、文化の違いが垣間見られることがある。私は、それを「稚拙さ」「間違い」として処理するのではなく、一つの研究価値のあるものとして見ていきたいと思っている。

注

1. 「宮体詩論」傅剛『中国典籍与文化』2004年01期
2. 「二十世紀宮体詩論弁述要」唐建『柳州職業技術学院学報』第二卷第三期2002年参照
3. 「万葉集と玉台新詠」尾山篤二郎『国語と国文』28-1 1951年
4. 「勅撰三集の閨怨詩について」井実充史『福島大学教育学部論集』第76号参照
5. 小島憲之氏「日本文学における漢語的表現Ⅰ—和習的なもの」1988.8
6. 白居易「離別難詞」『白香山詩集』巻36など
7. 归青「宮体詩淵源論二題」『上海大学学报（社会科学版）』第13巻第3期 2006年5月等
8. 『文化秀麗集』「秋月歌」論 井実充史「言文」第51号 2004.3

おおど はるこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科